

9月「Dolmetschen」 アントニア・シュルト

1.この前初めて通訳業務がありました。きっかけはドイツ陸上競技連盟の代表者が宮崎の運動施設を観察しに来たことでした。その4名の代表者に2日間付いていて、日本語からドイツ語、またはドイツ語から日本語へ通訳しました。前もって、出てきそうな単語などを準備してきていたが、正直自信はあまりなかったです。というか、断ればよかったと思うぐらい不安でした。幸い、両側が私は普段通訳あまりしないというところを理解してくれて、むしろ通訳者がいて助かりますというスタンスでした。それで私が。感じていた課題の重さが少し軽くなりました。



2.全体的にうまくいったとは言えるでしょうが、ドイツ語から日本語だとやはり難しいと感じました。専門用語は別としても、よく表現できなかったとか、不自然な日本語になってしまったときがありました。プライベートのとき、日本語がちゃんと出てきてくれないことも普通にありますが、その時はだいたいちょっと恥ずかしい気持ちで済みます。しかし、カメラを顔に向けられたり、知事が目の前にいて返事を待っている状況であれば、プレッシャーのレベルが全く違います。通訳の場合は、私のスキル不足で意味が伝わらなかったら、私はその責任を全て背負わないといけないというプレッシャーです。コロナ関係や自然災害といった重要な情報を英語に翻訳してホームページに掲載するときももちろんその責任は感じていますが、即時性はそこまでないですね。そういった気持ちもありながら、少し激しい2日間でした。反省点から言えば、語彙が足りない、集中力も足りないという自己評価になります。こういうのを仕事として毎日する人はスーパーマンに近い人間だと思います。



私たちは毎日だれかによって翻訳された書物を読んだり、テレビで通訳された演説などを聞いたりしますが、翻訳者、通訳者も影にいる存在で見えませんか。それはそういう仕事だからと言う人もいるかもしれませんが、2日間その立場にいた私はその人たちの毎日のストレスが実感できて、ものすごく尊重するようになりました。通訳者だけではなく、この社会を動かしている偉い人の影で働いている人たちの存在と貢献をたまに感心してあげましょうね。

